

写真4：全米日系人博物館新館



写真5：全米日系人博物館本館(西本願寺羅府別院)



この常設展では、幸運なことに日本語のできるドーセンツ(Docents)と呼ばれる、展示案内をしたり、私たちのような訪問者からの質問に答えてくださるスタッフがおられて、その方のお話を伺いながら展示室を歩くことができた。彼女の語ってくれる話のところで、予想外のエピソードがあった。そのひとつは「風月堂」というお菓子屋の話であった。アメリカで中国料理を食べる時にお馴染みのフォーチュンクッキー(おみくじ入りクッキー)が実は中国菓子ではなく、この風月堂で100%生産されていたことだ。

強制収容所を巡る、日系人の経験してきたことに関する展示物は、活字でしか知らなかったことを視覚的に教えてくれた。そのひとつは、1920年代のサンフランシスコ市で反日のプロパガンダとして使われていたであろうと思われるポスターであった。また、これと同時期だと思われるが、日系人たちが「ジャップは去れ。ここは白人の住むところだ。」と書かれたプラカードをつけてあいさつ回りをさせられたことについての資料にも出会った。

さらに、昨年度手に入れることのできた「シーブルック・ファーム」に関わる資料の写真と解説を見ることができた。写真はシーブルックという会社名が入ったトラックで、冷凍食品を扱っている会社であったことがわかる。その解説には、1947年2500人もの日系人たちがニュージャージー州のシーブルック村に移り住んだという記述があった。

展示室を一巡して考えたのは、日系アメリカ人が強制収容所に関する歴史を語らなかった理由だった。収容所への転住を強制されたことによって抱いた不安、怒り、恥が混じり合った複雑な感情で、日系コミュニティと個々の生活を破壊されたにもかかわらず、民族単位として少数で為すすべがないと諦め、「しかたがない」と肩をすくめることしかできなかったからであろう。

博物館の鑑賞を終えて、昼食の場を探そうと信号の変わるのを待っていると、館内で展示物の案内をしてくださったドーセンツの方に再びお会いした。その時、本館内に「強制収容所」の模型が見られるはずだからと、その中に招いていただいた。本館は初の仏教寺院として、ロサンゼルス日本人町に建設された西本願寺羅府別院で、1925年に日系移民有志によって完成されたものである¹⁵⁾。その奥の展示室にあったのは、カリフォルニア州マンザナーにあった強制収容所の模型で、荒涼とした土地の上に同じような味気のないバラックが整然と並んでいるものだった。

このような建物の中でプライバシーを失い、強制収容所に移る前の生活を失った日系人に思いを馳せて、今回の研修を終えることとなった。

4. プロジェクトを終えて

この「米国理解教育プロジェクト」で、改めて他の国で生きることの困難さを学ぶことができた。それは、マイノリティとして生きる中で受ける「視線」の恐怖と、日系アメリカ人が祖国と信じていたアメリカに適性外国人と認定され、強制収容所に送られた歴史と